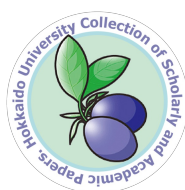




Title	スターリン改革と「学校ポリテフニズム化」政策について：ソビエト・ロシア教育史における分岐点に関する研究
Author(s)	所, 伸一
Citation	北海道大学大学院教育学研究科紀要, 86, 303-327
Issue Date	2002-06
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.86.303
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28868
Type	departmental bulletin paper
File Information	86_P303-327.pdf



スターリン改革と「学校ポリテフニズム化」政策について — ソビエト・ロシア教育史における分岐点に関する研究 —

所 伸 一

О политике “политехнизации школы” в период сталинской реформы:
опыт анализа переворота в истории образования в Советской России

Синъичи ТОКОРО

目 次

はじめに……………	303
注……………	305
第1章 1920年代後半までの労働・ポリテフニズム教育……………	306
(1) 十月革命当初の理念にうたわれた労働・ポリテフニズム教育とその実際……………	306
(2) 20年代後半の労働・ポリテフニズム教育理論……………	307
注……………	311
第2章 学校ポリテフニズム化の実践：工業化路線の圧力……………	313
(1) 第16回党大会（1927年12月）の工業化方針と、ポリテフニズム化の選択……………	313
(2) 教育人民委員ブーブノフ下のポリテフニズム化……………	317
(3) 全ロシア・ポリテフニズム教育大会（1930年8月）と理解の相異の凍結……………	320
注……………	326

はじめに

本論文は、ソビエト期ロシアにおける1920年代末以降、スターリン改革の時代の教育を、とりわけポリテフニズム教育（総合技術教育）を中心に検討するものである。時間枠は、ソビエト教育史上もっとも大きな分岐点をなす政治決定である、小学校と中学校に関する1931年8月のソ連共産党中央委員会決定が下されるまでとする。

ところでこのテーマ——ポリテフニズム——は、社会主義の教育理念の中心をなすものであるだけに、その関心はかねてより高く、日本においても、スプートニク・ショック後、1950年代末以降、一段と高いものになったが、しかし、研究側からのその対応は、文献翻訳・紹介にしばらく留まり、実証的・自主的な研究の深みにはついに達していなかった。このため、その一般の理解はかなり曖昧なままに、あるいは割れたままに置かれてきた。たとえば1980年代になっても、「この総合技術教育の思想は、レーニン、N.K. クループスカヤによって詳細に研究され、今日ではソ連をはじめとする社会主義国で実際化されている」⁽¹⁾ と言い切る百科事典がある一方、他方では、「それ（ポリテフニズム）は社会主義社会でも、たえず試行錯誤をくりかえしており、つねに実現への努力をかさねることが必要である」⁽²⁾ と、かなり慎重ないし「政治的

な」記述に終わる事典もあるという状況であった。

したがって、主要な人物の——たとえばルナチャルスキー、クループスカヤ、あるいはブロンスキー等の——著作翻訳は出版しながらも、長年このテーマと正面から切り結んで来なかった日本のロシア教育研究者たちの〈怠慢〉は責められてしかるべきであった。

1990年代に入って、ソ連の崩壊後、ようやく福田誠治の論文が出され(「教育と労働の結合：労働科の廃止をめぐる1930年代後半のソ連邦」『日本の教育史学』37集, 1994), 当時のポリテフニズムと労働教育の状況が一次資料によって部分的に描かれた。しかし、この論文はその結論で、ポリテフニズムの「当初の理念は……スターリンの推進した工業化路線に取り込まれてしまった」と言い、「さらに学校死滅論批判〔1931年——引用者〕と児童学批判〔1936年——同〕によって経験主義的な教育は封じられてしまっていたので……学校の中で実現する余地は残されていなかった。……学校死滅論批判を展開した時点ですでに、ポリテフニズムの理念は変質していた」とも言うごとく(p. 215), 該論文のテーマ範囲を越えしかも先行研究を無視した断定で終わっていた。上の指摘の後段に関わる歴史においては、実際には、ポリテフニズム理論の代表者たるルナチャルスキー、クループスカヤらは1920年代の公開論争のなかで学校の固有の役割を擁護することで、学校死滅論の批判をすでに始めていた⁽³⁾のであるから、「すでに……変質」とまで断定するためには、少なくともこの20年代論争との、そして工業化政策の開始と進展の関わりで、ポリテフニズム概念の「変質」を考察することが不可欠のはずであった。福田のおかげで、この分野の研究課題は鮮明になってきた。

小論が対象とする、この1920年代末——30年代は教育政策の転換の時代であった。しかしその実態把握は未解決のままに放置されてきたし、個々の事件のみならず基本的な文書についても評価は、主観持ち込み的になりがちであった。もっとも重要な、小学校と中学校に関する1931年党決定をめぐるからが、そうであった。わが国では早い頃からソビエト教育に社会主義を読みとることを自明視したため、この決定を学校死滅論批判・ポリテフニズムと社会主義教育を確立する段階の証拠と理解してきた。矢川徳光が典型であった。これは1920年代をなにか未熟な模索の時代と思わせ、他方1930年代以降の教育に露わになった権威主義・国家主義の要素を説明しがたくさせたのであった。後に生まれた逆の立場は、この決定が十月革命および1920年代の理想主義的な理念やシュリギーンも含む種々の実験教育を抑圧して詰め込み学校を復活させたと強調した。しかし、これはこれで、この決定が果たした、ロシアに近代学校を整備・促進させた要素——まさにこの故にソビエト的な体制は永年持続しえたのであるが——を過小評価ないし見落とさせる効果を持ったのである。

こうして、近代化後発国ロシアのこの時代教育政策・理論と1931年決定に関する説得的な歴史説明がまたれていた。

次に国外の先行研究について。ソビエト期ロシアにおいては、代表的なものでは、ミハイル・ヒタリヤンが1970年代に、労働・ポリテフニズム教育史の論文を連続して発表している⁽⁴⁾。しかし、その意図は、当代のソ連教育政策の「普通・労働・ポリテフニズム学校」という公的規定から課題を立てた、1930年代——50年代教育史をくポリテフニズム教育の探求で一貫したもの〉と描こうとするものであった。そのような方法は、小稿の筆者には、教育の概念規定を大幅にゆるめた、かつ歴史に対する反省の意識を欠いたもののように思われた。

他方、英語圏の研究成果に目を向けるならば、ポリテフニズムに関するモノグラフィーというには納まらないが、歴史家のレリー・ホームズ(米)の教育・社会史研究を秀逸として挙げ

るべきであろう。彼の本（1991年）『クレムリンと校舎（ソビエト・ロシアの教育改革過程、1917-1931年）』⁽⁵⁾は博搜した資料にもとづき、ナルコムプロスを先頭にした労働学校政策に対する経済系官庁や地方国民教育部および教員層の抵抗を描く歴史になっている。これは筆者にとり、当時の事件や団体・人物の複雑な相互関係を誤らず理解する上で大いに参考になった。しかし、ポリテフニズム理念に対する相対的に低い評価のほか、歴史観においては、欧米に多い、静態的ロシア社会観をまだ免れていないように思われた。

最後に、ソ連崩壊後のロシアにおける教育史認識に触れるなら、遺憾ながら、責任のある代表的な研究者層の中に清算主義的、責任転嫁的な態度が生まれていることを指摘せざるを得ない。例えば、アレクセイ・ピスクノーフらモスクワ教育大グループの教育史・大学教科書（2001年）である⁽⁶⁾。この本は、ポリテフニズムのいわば古典であるクループスカヤの著作『国民教育と民主主義』（1917）について、「その後長年にわたり、教育学においてソビエトの研究者のための公理となった。これはわが国の教育学研究の全体にうたがいなく害を及ぼした。」と書く（同書461頁）ように、ソ連の教育・教育学の不振の一因をポリテフニズム理論と労働教育の「過大評価」に求めようとしている。このような見方の根底には、世界史的な被制約性への洞察の欠如や、過去の教育の営みの中に主体形成のダイナミズムを読みとることができない、ロシア教育史学の弱さがあると小稿筆者には思われる。このような事情も本論文の執筆を促すことになった。

小論は、資料利用上の特色として、ロシア教育人民委員部の官報類と『教員新聞』を従来の研究以上に利用している。これにより、ようやく、当時のポリテフニズム論議や諸事情を政策と実践の相互作用として力動的に把握できるようになった。ただし、教育課程資料や公文書館（アーカイヴズ）保管資料などは利用しえておらず、現段階での歴史研究として或る限界は有している。しかし、本論文によって、先にわが国のロシア教育史研究動向レビューの折りに出されていた宿題——ブロンスキーを始めとするポリテフニズムの代表的提唱者自身が時期尚早と見なしていたポリテフニズム教育を当時のスターリン改革はなぜ「実現する」途に踏み込んだか⁽⁷⁾の説明等——を遅ればせながら提出できたと考えている。

はじめに — 注

- (1) 『平凡社大百科事典』第8巻、1985年、893頁。
- (2) 『岩波小辞典・教育』第2版、1973年、153-4頁。
- (3) 山口喬「1920年代末の教育学論争——いわゆる「学校死滅論」論争の発端——」、竹田正直編『教育改革と子どもの全面発達』ナウカ社、1987年、413頁。
- (4) М. Г. Хитарян, Трудовое и политехническое обучение в школах Западной Сибири в годы Великой Отечественной войны (1941-1945 гг.). Научные труды Новосибирского государственного педагогического института, 1974, вып. 103, стр. 49-64; М. Г. Хитарян, Проблемы трудового воспитания и политехнического обучения школьников в советской педагогике накануне перехода ко всеобщему среднему образованию (1937-1956 гг.). В кн.: Вопросы трудового воспитания и политехнического обучения в истории советской педагогики и школы. Вып. II, Вологда, 1975, стр. 12-113; М. Г. Хитарян, Трудовое воспитание и политехническое обучение перехода ко всеобщему среднему образованию, 1937-1956. Советская Педагогика, 1977, №6, стр. 117-125; М. Г. Хитарян и Л. П. Локоть, Трудовое воспитание и политехническое обучение в общеобразовательной школе 30-х годов (1931-1937 гг.), в кн.: Вопросы трудового воспитания и политехнического обучения, том 4, Вологда, 1977, стр. 91-122.
- (5) Larry E. Holmes, The Kremlin and the Schoolhouse: Reforming Education in Soviet Russia, 1917-

1931. Indiana U. P., 1991.

(6) А. И. Пискунов (ред.), История педагогики и образования. 2-е изд., М., Сфера, 2001.

(7) 所伸一「〈研究動向〉西洋教育史/ロシア・東欧」, 教育史学会機関誌編集委員会編『教育史学会40周年記念誌』教育史学会, 1997年, 214頁。

第1章 1920年代後半までの労働・ポリテフニズム教育

(1) 十月革命当初の理念にうたわれた労働・ポリテフニズム教育とその実際

①労働教育の受け止め方の分散的状态

1917年の十月革命により成立したソビエト・ロシアにおいては、誰もが学ぶべき普通学校は「労働学校」となると宣言された。これは「ロシア共和国の統一労働学校に関する規程」(1918年9月)によって次のようにうたわれた。

[第12条] 学校生活の基本とならねばならないのは生産的労働である。それは、児童の扶養経費を調達する手段としてでなく、また単に教授方法としての手段でもなく、まさに生産的・社会的に必要な労働でなければならない。〈以下略〉

[第13条] 労働学校における教授・学習は、両段階とも、普通教育的、ポリテフニズム的な性格を持ち、それと共に、体育及び美育が重要な位置を占める⁽¹⁾。

これを採用したポリシェヴィキたちの熱意は革命直後の理想主義的な機運の高揚を反映し、かつ革命前の子どもたちの抑圧された時代との決別を強く意図したため、たいへんなものであったが、しかし、実際の教育界における受け止め方はさまざまであった。それは、同時代人のパーヴェル・ブロンスキーによる分類をかりるなら⁽²⁾、次のように整理することができた。

第一の立場は、古い学校の内容は残したままに従来の言葉主義的な教育法を能動的直観という新しい方法に変えただけの者たちであった。この路線の中から地理、言語、自然などの労働的教授法という見解が出てきた。

第二の者たちは、「労働学校」のスローガンは何よりもまず教育内容自体を変えるべきものと考えた。これが統一労働学校の規程にうたわれたのである。しかし、この第二の立場の賛成者のなかでも意見が分かれた。ある者は、その労働を手作業あるいは家庭内労働、あるいは菜園等での労働といった狭い技術として理解した。この結果、学校では多種・手作業主義が支配し始めた。この立場の者たちはそれを進めて、職業専門教育をできるかぎり早期に始めるという考えに行き着いた。これはロシアだけでなく、ウクライナにも多かった。

労働学校支持派のもう一方は、始めから普通・ポリテフニズム学校のスローガンを打ち出した。この主張が先の規程の第13条として定式化されたのである。この陣営の代表的な人物がナデジダ・クループスカヤ、アナトーリー・ルナチャルスキー、ブロンスキーらであった。彼らは労働を社会的生産ととらえ、この生産を学校教育の土台に置こうとした。

このポリテフニズム派は労働学校を次のように捉えていた。ロシア共和国教育人民委員のルナチャルスキーはその史的唯物論に依拠して、次のように書いている。

「われわれが労働学校と呼んでいるものもまた(中略——引用者)論理的に完成した民主制の一領域に属す。(中略)マルクスは、労働学校の原則を基本的に述べた、第一インタナショナル

に宛てた有名な文章の中で、その文脈から明らかなように（中略）労働学校を、8時間労働日、男女の同一労働同一賃金などの要求と並んで、資本主義社会のまっただ中で実現されうるものと考えている。」⁽³⁾

ともあれ、労働学校をめぐる態度について、このような色分けが、スターリン改革が教育内容と方法を変えるまで、しばらく有効であった。

②1927年の「安定」化と労働の科目の導入

しかし革命後初期の10年、労働教育の実践においては、先の2つの派ともに困難に逢着した。前者は生徒を日常生活、奉仕活動、農業の作業に参加させる実践であり、これは系統だった教科教育の破壊と低い教育効果に行き着いた。ブロンスキーは同時代に、子供の組織活動が「教師抜き」で、なり行きまかせの場合の腐敗が生じていると指摘した⁽⁴⁾。ポリテフニズム派は、教育人民委員部（以下、文脈に応じナルコムプロスと呼ぶことがある）下の国家学術会議（略称GUS：グウス）が作成したコンプレクス・プログラム（合科教育課程）を1922/23学年度に導入したが、不十分な物的条件と教員の低い資質の下で、学校現場の労働活動は「理論学習によってすり替え」られていた⁽⁵⁾。

この時代は、革命直後の規程にうたったような「学校生活の基本」としての労働原理は実現することができなかった。

このため、ナルコムプロスの方針によって、1927/28学年度には、「古い学校と新しい学校の理性的な妥協」がはかられ、これが教科別の授業方式への回帰となって現れた。一般の学校に独立教科としての「労働」が導入されたのである。これは、現代ロシアの労働教育の研究者、N.コトリャホフたちの巧みな表現をかりるなら、「ポリテフニズム教育の理念の部分的な否定と見ることができ、また他方、労働学校の創造に向かう実践的に重要な一歩と見ることもできた」⁽⁶⁾。

(2) 20年代後半の労働・ポリテフニズム教育理論

本論文の扱う歴史の主たる時代に入る前夜の労働・ポリテフニズム理論をここで見ておこう。

①ナルコムプロス主流の労働教育観

ポリテフニズム論者のルナチャルスキーは、1927年、『教育百科事典』へ寄せた巻頭論文で、以下のように見解を書いている。

「マルクスの労働学校は、きわめて工業的な学校である。わが国の工業化の伸展につれて、マルクスのタイプの労働学校を実現する可能性も、当然ひろがって行くであろう。」「われわれは、工業化が比較的弱く、農業は極端におくれているわが国においては、本当のことを言えば、マルクスの学校を工場徒弟学校（ファブザヴッチ）という形においてしか実現することが出来ないのである。」

「その他の学校のためには、非プロレタリアの都市児童の学校や農村児童の学校——それが初等の学校であれ、農村青年学校であれ——のためには、われわれは労働の代用物(surrogaty)を導入しなければならないことは明白である。代用物とは、あるいは手工業経営や農家経営を土台とした仕事、あるいは大工業の領域や工業化された農業の領域への見学、あるいは適切に構成された教育課程や教科書（少なくとも生きた現実の上に立ち、言葉での説明や直観教材によったりして、わが国の労働そのものの総じて低い熟練度の事実から生まれてくる大きな欠陥

をできるだけ埋めてゆけるようなそれ)である。一国における労働そのものがまだ十分な水準に達していない限り、学校は十分な水準に達せられることはできないし、とくに労働学校はそうである。」⁽⁷⁾

このようにルナチャルスキーは、ロシアにおいてはその工業条件の発展度合いに照らして、ポリテフニズムはおろか、ブルジョア段階で実現可能な労働学校も、その代用物しかまだ可能になっていない、と把握していた。このような彼の段階論に基づく歴史課題の立て方は、たしかに、ポリシェヴィキの論客、ブハーリンがレーニン没後4周年の演説(1928年1月)において、「われわれは、広範な人民大衆に経営の合理化と正しく計算する能力を全力を挙げて教えることが必要だ。」と語っているところと近いものがあった⁽⁸⁾。

②児童学研究に進んだブロンスキーによる労働教育の意義付け

ブロンスキーは名著『労働学校』(1919年)において、20世紀を工業化の世紀ととらえており、これにふさわしく次世代をはぐむ学校構想として、労働学校、ポリテフニズムの思想を提起していた⁽⁹⁾。これがロシア革命指導者レーニンの教育観にも、大きな影響を与えた。ブロンスキー自身はその後、社会教育アカデミー(1922年、設立)において研究活動に従事し、1920年代の半ばには児童学に重点を移していた。彼は、子供の成長にとって労働の持つ意味を説明し、発達段階と労働内容との関係を確定しようとして、また、児童学に基づいて学校教師の活動の合理性を説明し、教師を支援する学問をうち立てんと指向した(参照:ブロンスキー「子どもの労働の児童学」1926年;同「教師になぜ児童学が必要か」1928年)⁽¹⁰⁾。

彼は、教育人民委員部の下のグウス内にある教育学部会が「労働」教育課程の作成のため労働専門委員会を設置したのにもない、その研究会議において報告している。この一つにおいて(1926年6月以前)、ブロンスキーは、興味と要求に基づく子供の労働がもつ発達促進的な性格について報告した。彼は、知的発達にとり手の発達が持つ大きな意義を強調した。また、遊びと労働の違いを強調するとき、ブロンスキーはそれを何よりも動機において見ていた。遊びの動機は「筋肉活動の充足、現実性からの昇華、逃避」であり、労働の動機は具体的な必要の充足である、と。

児童学者としてのブロンスキーは、「労働が子供に定着するようにするためには」として、「子供の労働が真剣なものであること、子供が自分の労働にきわめて真剣に取り組むこと」を指摘しなければならないと報告し、さらに、「子供は、その労働がつまらない物だと見られることを好まない。もしわれわれが、子供の労働が進化・発展すること、そしてそれが目的ぬきの純粹に衝動的な活動という子供段階にとどまっていないことを望むのなら、われわれは、労働に、子供の必要のためになる、子供の要求を満たす要素を取り込まなければならない。子供の必要から発展してくるような労働がもっとも教育的なものである。」と結論した。彼が主張したのは、子供の労働には始めに「創造的な自由」のモメントがあり、次に教育者の介入、目標の提示がくる、ということであった(前掲「子どもの労働の児童学」)⁽¹¹⁾。

ここには、ルソーを始めとする近代教育思想の子供観・発達観を継承しつつも、余儀なくされた児童労働が至る所に存在したロシアの現実を考慮に入れて、子供の精神的・身体的な発達の独自性への配慮を理論化しようとした試みを見ることができた。

③技能訓練重視のガーステフ。テイラー主義のロシア版

この1920年代ロシアにおいては、学校教育論の外の潮流として、影響力のある労働訓練論があった。ポリテフニズム論者はこれと闘わなければならなかった。それがガーステフ主義(Gas-tevshchina)と呼ばれたものである。提唱者のアレクセイ・ガーステフ(1882-1941)は、教師の家に生まれ、革命運動のため師範学校を放校になって後、名門の全ロシア金属加工労働組合の書記となり、かつプロレタリア詩人としても活躍し、名をなしていた。彼は、1920年、アメリカの科学的管理法、テーラー・システムの研究のために全ロシア労働組合中央評議会の下に付属中央労働研究所(略称 TsIT: ツイット)を設置し、所長として研究を指導する。ツイットはレーニンの支持を得て、作業動作の分析を研究し、ここから作業企画を設定し、板金仕上げ工、旋盤工などの養成法を次々と完成させて行った。これら一連の養成法はツイット法と呼ばれ、実際に労働者の訓練にひろく用いられた⁽¹²⁾。

ガーステフは、『新しい文化装置』(1924)と題した著書の中で、ポリテフニズムに対する自身の見解を述べている。

「われわれの共和国は社会主義共和国という名である。われわれの学校は労働学校という。だが、これまでのところは、本当の話、実際に、われわれの労働と普通教育の読み書きの問題が解決されていない。われわれは、初歩的な労働ポリテフニズムの問題を、レジームの問題と同じくらい熱心かつ明確に提起しなければならない。このためには一定の物質文化が求められるのだ、これには資金が必要なのだと、言い訳はすべきでなかろう。現在、工場が手つかずにたくさん残っており、高等と中等の学校には高価な工作機械と工具がたくさんあるのに、物的な面の出費のことを語るのは実にばかげている。われわれは、ごく不可欠最小限のもので、なおかつ労働に対するもっとも価値があり、もっとも有効な導きだとみなされることになるものを提起しようとしているのだ。労働的ポリテフニズムをわれわれは3つの路線で提起している。すなわち、道具・筋肉中心の方法、機械中心の方法、そして装置据付け中心の方法、である。」⁽¹³⁾

このようにガーステフは、ルナチャルスキーたち文教政策中枢の労働教育・ポリテフニズム教育のもつ発展の段階論を念頭に置きつつ、遠い先にしか実現できそうにない理想を論じて差し迫った課題への着手をおろそかにするのでなく、現有の条件下で初期機械化段階の労働訓練に重点を置くべきであるとの対抗案を主張しているのであった。

グウスの教育学部会の或る会議に招かれてガーステフは、「学校はプロレタリアートを育てなければならない、市民を育てるのではない、そして何よりも工業の利益から出発しなければならない」と言っている⁽¹⁴⁾。

「工業の利益」とは何か。ガーステフは、当時のロシア経済界の要求の水準を反映したのであった。すぐのち、工業化政策の開始と共に労働力の供給が大きな問題となったとき、この問題のソ連 Gosplan 主催の全ソ会議(1929年2月)に出席したナルコムプロス職業教育局長サムイル・ガイシノーヴィチは、ポリテフニズム教育の意義には、狭い専門分業の穴埋めをする手段として、分断された作業、コンベアーでの作業に従事する労働者に補償措置を行う手段として、大きなものがあると主張したが、この主張は、参加していたヴェセンハ(国民経済最高会議)など経済団体側と同じ立場にまわったガーステフによって、ナルコムプロスは無用な「人文教養主義」の立場に立っているとの異議申し立てをされたのであった⁽¹⁵⁾。

このようにガーステフは、労働力に対する経済界の態度と同様、ポリテフニズムに対しては

「余計で、ぜいたくな教養」とする見方を抱き続けた。

④無政府主義的批判勢力としての学校コミュン論者、シュリギーン

古くからのポリシェヴィキであり、1918年の統一労働学校規程の論議の時にはコミュン学校論者として振る舞ったヴィクトル・シュリギーン(1894-1965)は、その後、1920年代、ナルコムプロスの学校活動方法研究所の所長として論壇にしばしば顔を出していた。彼は、レーニンの『国家と革命』その他の著作に散見される無政府主義的な言い回しを援用して、民衆の自然発生的なイニシアチブが新しいコミュニ的・協同連合的な形態を生み出す社会を描き出した。彼は1927年の春、講演で次のように述べている。

かつてなかったものが起こっている。今は昔と違う。都市と農村の矛盾も死滅しつつあり、頭脳労働と肉体労働をへだてる溝も消滅しつつある。「ソビエトの各部門、労働者通信員、教師通信員、農村通信員、労働組合等々の巨大な意味が、そこにあるのだ。大衆が〈管理〉を学んでおり、そのために文献を、本を利用して学んでいる。まさにこの過程はさらに広がってゆくだろう。」「生産は教育のためになるように組織されるだろう。生産は教育化され、同様に市街も教育化されるだろう。」

「カオスは鎮まりつつある。大衆は経験から、建設から、闘いから、実践からますますたくさんそしてますます深く学びつつあり、頭脳労働と肉体労働の境、労働と美学の境はますます急に消えてなくなりつつあり、子供たちは建設にますます入り込みつつあり、学校は学校であることをますます止めつつあり、学校としては死につつつあり、何か新しい、今までなかったもの、見たことのないものになりつつある。」「ますます沢山の子供たちがその外で学びつつある。すなわち、畑で、作業場で、工場で働いている。学校は、学びの場から子供の労働の組織の場になりつつある。しかし、これはもう学校でない。その基本的な役割——教えることは消滅しつつある。子供たちは学び始めており、至る所で学んでいる。では学校は？ 学校はここで彼らを助けるのである。それだけである。」⁽¹⁶⁾。

これは、要するに、学校は次第に生産の中に「解消され」ねばならない、したがって労働授業ばかりか、独自の座学の授業というものが一般に不要になってゆく、という主張であった。20世紀前半の「脱学校」論とも呼びうる、これらの論の支持者たち(他に主要な人物としては、彼と同じ研究所のマリヤ・クルペーニナ等)は、事実上、校外の社会活動への参加で公的な就学と取り替えてもよいと提案したのだった。クループスカヤは、シュリギーンたちの関心に同情的なところがあり、彼女が主宰する雑誌『新学校への途上』は彼らの見解のために1920年代を通して誌面を提供してきた。しかし、シュリギーンは、教育理論と実践の発展におけるマージナルな存在にとどまっていた。

ところが、1928年に始まる「社会主義建設」とその一環の「文化革命」によって新しい政治情勢が開けると共に彼らに舞台が提供されることになるのである。この年、シュリギーンの研究機関は『科学的教育学の諸問題』を刊行し、「教育学論争」を一つの社会現象に高めていった⁽¹⁷⁾。

ルナチャルスキーは1927年の論文で、シュリギーンたちの学校批判の存在を念頭に置いて次のように書き、学校教育を擁護しつつその意識的な役割を対置した。

「生活そのものと社会体制全体が新しい世代を育成していくと主張する人々は、真実を語っている。これは社会学的にはまったく正しい。しかし(中略——引用者)社会主義を目指す経済・文化闘争のこの初期段階の生活はきわめて雑多なものである。生活は、進歩的な要素とともに、

多くの疑わしい要素や、悪しき要素までもふくんでいる。(中略)生活は子供たちを、言ってみれば、心配でいらさせたり、右や左へ放り出したり、今度は後ろに放り出したりする。このため生活の影響は混沌たるものになる。」

「残念ながら、学校そのものもまた、たまたま行きがかりで教師になった古いタイプの者たちを抱えており、学校自身が貧困であり、その教育方法は研究不足である、などにより、教育的な意味においては、しばしば、環境とさして変わりがない。

しかし、これはそうであってはならない。国立の育成機関としての学校は、どのような社会生活よりも早く、新しい精神に浸透されねばならないし、生活慣習にたちまさらねばならない。学校からは教育的な力が出てこなければならない。生活が子供に与えるゆがみを学校は正さねばならない」⁽¹⁸⁾。

ルナチャルスキーの場合は、このように実生活と学校の教育作用の相違を明確に区別しており、学校という社会制度の組織的で独自の役割を高く評価してきた。これはこの後も変わらず、1928年末の彼らとの公開論争の場においても一貫していた⁽¹⁹⁾。シュリギーン理論についてブロンスキーは、「学校の陶冶活動の過小評価、自然発生性、学校の生産活動への埋没から独特の教員イデオロギーを作りだそうとする企て」に他ならないと書いた⁽²⁰⁾。

しかし、このシュリギーンの影響が、このあと1930年に、プロジェクト・メソッドがプロレタリア的な教授法である、そしてポリテフニズム実現の方法でもあるとして展開される形でピークに突入するのである。

⑤クループスカヤのポリテフニズム論

この1920年代後半のロシアにおける労働教育・ポリテフニズム教育の理論的検討において一つの高みを示したのはクループスカヤであった。それは、工業化の時代の初期に発表された、彼女のグウス総会への報告要旨「ポリテフニズムについて」においてまとめられた(『新しい学校への途上』誌、1929年第3号掲載)。

ここで彼女は、ポリテフニズムを「技術をその様々な形態において、その発展とそのあらゆる媒介物を通して、学習することを基礎とする一貫した体系」と定義した⁽²¹⁾。彼女は、ポリテフニズム原理は「全学科に浸透しなければならない」こと、「これらの学科の相互連関」が必要なこと、「それらと実践活動との結合」なканずくポリテフニズム学校におけるそれらと労働の学習との結合、すなわち一つには、「共通の労働経験の獲得」が、他方では「労働諸過程を、技術と労働組織とそれらの過程の社会的意義の観点から、理解すること」が必要であることを述べた⁽²²⁾。

これらの概念化は、当然ながら、十月革命以前からのロシアの学校における労働教育の実践経験と、ガーステフ、シュリギーン、あるいはアルベルト・ピンケーヴィチ、イワン・オゴロドニコフ等々多数の、教育学論争をいづる教育者群との交流とがあって初めて得られたのであった。しかし、この理論の到達点が、この後、教育課程を始めとする実践に具体化され、実現されていくかどうか。それはソビエト・ロシアの現実の展開にかかっていた。

第1章 — 注

- (1) Народное образование в СССР. Общеобразовательная школа. Сборник документов. 1917-1973 гг. М., 1974, стр. 133-7. 邦訳: 藤井敏彦訳, 『広島大学教育学部紀要・第1部』第16巻(1967), 62-3頁; 柴田

義松・川野辺敏編『資料ソビエト教育学』新読書社、1976年、487-8頁。資料・著作の邦訳文献を参照し得たかぎり明示するが、本稿への引用文は必ずしも既訳に従わない。以下同様である。

- (2) П. П. Блонский, Организация труда, как учебный предмет в школе II-й ступени, “На путях к новой школе,” 1923, № 1 (4), стр. 3-4. 邦訳「第二段学校の教科としての労働の組織」, 三沢正博・笹島勇治郎編訳, ブロンスキー『労働学校と総合技術教育』明治図書出版, 1975年, 120-121頁。
- (3) <А. В. Луначарский о народном образовании>, М., 1958, стр. 398. (邦訳「ソビエト教育学の社会学的前提」, 矢川徳光編訳『労働教育論』明治図書出版, 1960年, 180-1頁); <А. В. Луначарский о воспитании и образовании>, М., 1976, стр. 185.
- (4) Блонский, Там же, стр. 4. ブロンスキー前掲論文 125頁。
- (5) Н. В. Котряхов и Л. Е. Холмс, Проблема трудового политехнического обучения в советской школе и педагогике 20-30 гг., “Советская педагогика,” 1990, № 10, стр. 111.
- (6) Там же, стр. 111. および N.V. コトリャホフ, L.E. ホームズ著 (山口喬, 遠藤忠, 村知稔三訳)『ロシアの労働学校の理論と実践 1917-1932年』長崎大学教育学部教育実践研究指導センター刊, 1998年, 57-58頁, 参照。
- (7) <А. В. Луначарский о воспитании и образовании>, стр. 186-7; ルナチャルスキー, 前掲「ソビエト教育学の社会学的前提」180-181頁。
- (8) Н. И. Бухарин, Избранные произведения. Ред. коллегия: Л. И. Абалкин и др. М., Экономика, 1988, стр. 385. 強調の箇所は原文のもの。
- (9) П. П. Блонский, Избранные педагогические произведения, Т. 1, М., 1979, стр. 86-164; 邦訳, 三沢・笹島訳『労働学校と総合技術教育』所収 21-119頁。特に第2部第22節「工業的=社会主義的文化」参照。
- (10) П. П. Блонский, Педология детского труда. “На путях к новой школе,” 1926, № 5-6, стр. 26-30; Его же, Зачем учителю нужна педология. — Там же, 1928, № 9, стр. 28-32.
- (11) П. П. Блонский, Педология детского труда. — Там же, 1926, № 5-6, стр. 28, 29-30. 参照 Н. В. Котряхов и Л. Е. Холмс, Указ. статья, стр. 111-112.
- (12) 深津敬三「ザミャチンの『われら』におけるテラー・システム——初期ソヴェト体制下における科学的労働組織論の展開と逆ユートピアの成立——」, 『ロシア史研究』第42号, 1986年, p.106.
- (13) А. К. Гастев, Новая культурная установка, изд. 2-е: ВЦСПС-ЦИТ, М., 1924. В кн.: Как надо работать: практическое введение в науку организации труда, Москва, “Экономика”, 1966, стр. 96-97.
- (14) Н. В. Котряхов и Л. Е. Холмс, Указ. статья, стр. 111-112.
- (15) С. Гайсинович, Наркомпрос, ВСНХ и ЦИТ о политехнизме. “На путях к новой школе,” 1929, № 3, стр. 48.
- (16) В. Н. Шульгин, Педагогика переходного периода. “На путях к новой школе,” 1927, № 9, стр. 8, 11.
このシュリギンの主張について村山士郎『ソビエト型教育の形成と学校コミュニオン』(大月書店, 1999年)が取り上げ, それは学校の死滅という大方向と, 学校と学校外の社会の協力(及びポリテフニズム)の必要という点においてルナチャルスキー, クループスカヤらと共通の志向をもっていたと強調する(同書 215-220頁)。しかし, 小考の筆者は, 村山のように当時のシュリギンの言説をば後の1931年党決定により批判・放棄されたものの中の「発掘」のごとく持ち上げることは妥当性を欠いた読み取りに過ぎず, ソビエト的学校は「死滅」に向かう概念をもって論じられるよりも以前の, 何よりもまず学校としての「誕生」「成長」が求められる過程にあった歴史の中で論じられなければならぬと考える。
- (17) 山口喬, 前掲「1920年代末の教育学論争」, 399-401頁。
- (18) <А. В. Луначарский о народном образовании>, стр. 398. (邦訳: 前掲『労働教育論』185-6頁); <А. В. Луначарский о воспитании и образовании>, стр. 189-190.
- (19) 山口喬, 前掲論文, 参照。
- (20) П. П. Блонский, На путях к политехнизму. “На путях к новой школе,” 1932, № 9-10, стр. 3. 三沢・笹島訳, 前掲書, 所収, ブロンスキー「ポリテフニズムへの途上で」167頁。
- (21) Н. К. Крупская, О политехнизме, “На путях к новой школе,” 1929, № 3, стр. 41; Педагогические сочинения, т. 4, 1959, стр. 195; 邦訳, 市来努・関啓子・福田誠治編訳『ポリテフニズムと教育』明治図書出版, 1978年, 所収, 78頁。

(22) Крупская, Там же, 1929, № 3, стр. 41; Там же, т. 4, стр. 196; 邦訳, 同上, 78-79 頁。

第2章 学校ポリテフニズム化の実践：工業化路線の圧力

(1) 第16回党大会（1927年12月）の工業化方針と、ポリテフニズム化の選択

ソ連共産党の第15回大会は1927年12月、工業化の方針と文化革命——文盲一掃の完遂と普通教育実現——の方針を採択した。この方針に沿って、1928年10月からは「ソ連邦国民経済復興5ヵ年計画」が開始される。この中でポリテフニズム理論はその取り扱われ方とともに変化することを余儀なくされていく。この章では、それをほぼ時間を追って見ていくことにする。始めの節は1929年前半頃までとすることができるであろう。

青年共産同盟（コムソモール）は、この時代に入る前から、労働者出身生徒が学校を中退しがちで、その生徒構成と教育内容の点で非プロレタリア的だとして中等学校（当時は統一労働学校第二段と呼ばれた）を批判し、これを職業系の学校に再編することを要求してきたが、この青年組織は、工業化の時代に入るとともに、その攻勢を強めてきた。ルナチャルスキーは、1928年5月、全ソ・コムソモール大会における演説で、その弁舌能力を駆使して、この青年組織の中等学校職業化の主張を牽制するため、「ポリテフニズム学校化」をあらためて対置した。これは、引き続き実践争点の再浮上であった。

彼は、「コムソモールは自己の決議において何を提起しているのか」と問いかけ、この大会がソビエト経済界の最高機関：ヴェセンハ（国民経済最高会議）の議長、クーイブシェフの演説を受けたところに沿って、大会決議の中で「段階的に、職業学校化された後期課程に変える」よう主張していることを批判する。「それはウクライナが行った経験にいくらか近づくことを意味する」「第二段学校の後期課程をば、まるで進学の準備と生活への準備という2つの合流しない道を追うものであるかのように見ている」と。ルナチャルスキーはポリテフニズムの名において、中等学校のアカデミックな教育・学習の意義を擁護することでは知られていた。彼は、コムソモールの要求するような職業学校転換が行われるならばとして、「われわれは、われわれにとって価値があり、プロレタリア化されることができ、将来はわが国の大学のあり方を決めることになる第二段学校をば閉鎖することになる、つまりは、わが国の文化と経済の営み全体にきわめて大きな打撃を与えるのだ。どんなに職業化された学校においても、やはり二面的な性格を維持することは必要だ。つまり、より有能な人あるいはそれを望む人は大学へ進む可能性を持たねばならないし、彼らに対しては大学が求めているような要請に見合った一般教育を保障してやらねばならない。それと同時に職業教育も維持されねばならない。」と言い、「何のために学校の職業化というスローガンを提起するのか、なぜ古いスローガン、ポリテフニズム学校というスローガンへ戻らないのか、これが分からない。」という論理で職業学校化要求に応酬し、十月革命以来の理念を対置した⁽¹⁾。

いっぽう、クループスカヤは1929年、自ら編集長をつとめる『新しい学校への途上』誌第2号において、予定される教育問題党会議（実際には翌年、1930年4月に延ばされた）に向けて、ポリテフニズムを特集した。その中で彼女は、ポリテフニズム教育について、直面する大改革との関連で位置づけを述べた。彼女は、ここで、「国の工業化と農業改造の問題が労働力養成の問題とその養成におけるポリテフニズム陶冶の役割の問題を、きわめて鋭く再提起した。教育家たちの間では、一度は下火になったポリテフニズム論争がはや再燃した」として論議の再興

を喜ぶと共に、次のように、課題の環を教員養成の水準引き上げに求めつつ、主体的な条件の改造への決意を表明した。

「明らかに、教授・学習への接近法は教師のポリテフニズム的な資質、ごく単純な労働動作をより複雑な動作と結び付ける能力、労働過程の要素全体を明瞭に分析する能力によるのであって、ひとり設備だけによるのではない。」「ポリテフニズム教育をどれくらい深く実施しうるかは、現段階のわが国の技術の状態に規定される。しかし、ポリテフニズム教育は進歩の結果であるのみならず、『工業化の武器』でもある」⁽²⁾。

クループスカヤは、ここにおいて、ポリテフニズム教育をば近代化が相対的に遅れたロシアを工業化するための手段にもなりうるという接近法に自説を拡大解釈して行くのであった。

しかし、われわれは、彼女が同じこの論文において次のようにも書いていたことを忘れてはなるまい。

「諸条件の妙なめぐり合わせにより、わが国は貧しく、学校を整備できず、新しいやり方で働くことを子供に教える能力に欠けているために、われわれは一段飛び越した。学校では社会主義的労働よりも共産主義的労働の教育のほうを実践している。われわれの社会的有用労働は共産主義教育のひとつからではあるが、しかし、この社会的有用労働は政治集会や出し物の上演などにしよっちゅう変質する。変わってしまうのは、その労働に社会主義的労働の基礎が据えられていないからであり、真剣に働く能力、意欲、習慣が欠けているからであり、本当の労働の鍛錬(zakalka)、仕事、労働への興味、集団で働く力量、自己の仕事の成果を点検する力量が欠けているからである」⁽³⁾。

彼女は、言い換えれば、西洋社会との比較を意識したロシアの社会発展段階を自覚していた。彼女は、近代的な労働の習慣や勉強の仕方、教育の組織法を獲得しないまま、つまりスキップして社会主義に進むことはおぼつかないのだ、ロシアの固有の社会の立ち後れを自覚せよと訴えたのであった。

彼女の最大の難問は、このような複眼思考を共有する、カリキュラムの作成と実践が可能な同僚を見いだすことであった。

こうした中で、1929年2月、全ロシア共和国州・地方国民教育部長会議が開かれた。この会議は、そこで行われた議論が中央と地方の当事者たちの現状認識を比較的好く反映したと同時に、機関としての路線の選択・決断において節目をなすものであった。

会議は、ルナチャルスキーらの予想に反して、ナルコムプロスの系統内部においてもスターリン指導部の意を受けた教育の階級闘争路線に共鳴した部分が意思表示に出て、彼らが人民委員を詰問するという、かつてない激しい性格のものとなった。

ルナチャルスキーは「教育問題党会議の基本問題」と題して学校制度政策の全般について報告したが、参加者の一部から政策実行の手法について詰問されたことを受けて、これに反論する中で、「ヴィヒリョーフ同志は政治革命と経済革命・文化革命の間にある差異を忘れている。」「経営上の社会主義革命は数十年かかって成し遂げられるのだと、マルクスとルクセンブルグは言っている。その間にプロレタリアートは周りの環境を変革しなければならないだけでなく、この闘いの中で自分自身をも変革しなければならないのだ。これが文化の革命である」と自説を述べた。彼は、文化革命は長期にわたるものだが、まだ始まったばかりで、これが「党の多くの同志やソビエト機関の指導部の頭にはまだ起きていない」と挑戦的な批判の言葉で結んだ⁽⁴⁾。ルナチャルスキーはまた、参加者の一人が政治路線論にまで立ち入って批判してきたこと

を受けて、「ビシャーリン同志は、ルナチャルスキー同志は要員の問題を語っているが、教員の社会的構成には沈黙した（中略）ルナチャルスキーとナルコムプロスにおいては右翼的な傾斜が存するとまで言った。私はビシャーリン同志がここで述べたことに対しては、徹底的に戦うと述べなければならない」とやり返した⁽⁵⁾。

プロレタリア的強硬派——ここではレニングラードの教育部長、ビシャーリン——は、行政的・権力的な措置に依拠してでも、労働者出身者を教員に採用することが左翼の取るべき政策と考えていた。ナルコムプロス系統内の幹部たちからもこのように異論を対置されることとなり、ルナチャルスキーは、かえって、文化革命の路線とは一線を画する態度を鮮明にしていった。

文化革命に対する態度について、この会議は、ルナチャルスキー、ポクロフスキーら指導部が消極的な対応を示したにもかかわらず、文化革命を支持する諸決議を採択した。決議は、ナルコムプロス参与会が労働者グループ、党中央委員会アジプロ部、およびコムソモール中央委からの代表を取り込んで拡大されるよう要求した。3月終わりの前、ある日、ナルコムプロス参与会はこれらの要求をのんだ決議を承認した⁽⁶⁾。

ナルコムプロスに対する粛清の攻撃は、このような形で始まり、この年の秋のルナチャルスキー解任でピークに達するのである。

ポリテフニズムに関わる方針については人民委員代理のポクロフスキーが分担し、その報告の中で、これを導入する課題の切実性を以下のように提起した。

「わが国では、工業化ならびに社会主義建設との関連で文化的引き上げが不可欠であると言われているが、しかし、これがしばしばこの引き上げの量的な側面のみがわれわれに取り重要であるかのように、国における文化の量を増やすことが必要だ、読み書きできる者、算数、物理、化学などを知っている者がもっとたくさん必要だと語られるが、しかし、われわれには一定の質の文化が必要なのだ、学校一般ではなくてこの新しい時代の必要に応えるような何か新しい学校が必要なのだ」と明確に語られておらず、強調されていない。ここに問題がある。」……。「われわれは連日、新聞で〈大衆の統制の下に〉という見出しを目にする。だが、もし生産を何も理解していない人々がこの生産を統制し始めるなら、いったいどうなるのか？ 生産そのものが嵐の速さで新しい方法に移行していることを言うまでもないが、この移行はわれわれにポリテフニズムの学校を持つ必要を教えているが、私はわが国にはいささかも存在しないと思う。この学校は紙の上のものである」⁽⁷⁾。

ポクロフスキーは、ポリテフニズムの普遍文化的な意義を訴える力では、たしかにルナチャルスキーの教養と弁舌、クループスカヤの教育学的素養と比べられるのは酷だった。しかし、彼の以下のような報告演説は、ある意味で追い込まれた教育人民委員部のこの路線選択の余儀ない段階を正直に訴える効果を持ったように思える。

「もしわれわれが現代の工業に、大学に、工業大学に技術の文盲の人々を送り込むなら……私が報告要旨で述べていることが起こるであろう。もしわれわれが技術のイロハを知る人間を育成する学校を作り出せないなら、ヴェセンハ（国民経済最高会議）やエヌカペーエス（運輸人民委員部）などがそうした学校を建設し始めるだろうし、結局われわれは昔の姿に戻るだろう。われわれは、もっぱら古典ギムナジヤだけしか所管していなかったプロシアの文部省の位置に近づいているのだ。」

「私は、本物のポリテフニズム学校を創造する試みがきわめて切実になっていると考える。も

ちろん私は、これを布告を発することによって2-3ヵ月でできるものでないことを知っているが、これに現実に着手すること、一連の必要な措置をとること、ポリテフニズム学校を紙の上でなく実際に創造する具体的な手だてを考えること、これが今、死活問題として実際の必要であると考ええるものである。まさにここに私の主旨がある。このためにわれわれは、いつだったか〔1920年代初頭——引用者〕、ウクライナ派と、いやウクライナでなくとも、ポリテフニズムでない単なる技術学校の立場に立つ人々と、激しい闘いを交えなければならなかった」⁽⁸⁾。

このように、いわば瀬戸際から最後の反撃のように提起されたため、この問題に関しては、政策手法の在り方では対立する文化革命強硬論者のように見えたアレクシンスキー（モスクワ国民教育部）も、物的及び理論的な準備経過を汲んで、次のようにルナチャルスキー＝ポクロフスキー派に回らざるを得なかった。

「学校でのポリテフニズムに関してでは、今までわれわれは一步も動けないで居る。この点では、われわれの物的な不可能ばかりでなく、或る原因も障害である。人々が学校のポリテフニズムについて語るとき、みな、このポリテフニズム学校そのものを自己流に解釈している。FZU（工場付属徒弟学校）はポリテフニズム学校でない、これは職業・技術学校だ、けだしそこでは特定の専門が教えられるからだ。これはそこに労働があるという意味では労働学校だが、この労働は、たとえば数学やそのほか一連の科目をやるときには、一定の理論的な説明を受けるのだ。この10年われわれはモスクワで、建物をひとつとしてポリテフニズム学校にしてこなかった。われわれは現在のコトバ主義の学校からポリテフニズム学校に移行する形態を、ここで取り上げていること以外に、別の段階を通じては見つけようとしなかった。いまモスクワでは最新の技術で新しい学校が5校建設中であるが、ナルコムプロス参加会の力を借りてでも、これらの学校の建物に、本物のポリテフニズム学校を創造しなければならない」。「農村では現在の活動技術の水準の下では手職の傾斜と意味のある労働学校を作ることができ、一定の知識分野を教えることができるが、しかしポリテフニズム学校を創出することは当分できないだろう。ポリテフニズムに関するやりとりには、われわれがまちまちの言葉で話さなくて済むよう、この問題に様々な解釈が生じないよう、明快さを加えなければならない」⁽⁹⁾。

会議のこの討論の中では、ルナチャルスキー、クループスカヤ、人民委員代理エブシテーインらがポクロフスキー報告をフォローして発言している。

ルナチャルスキーは、「ミハイル・ニコラエヴィチ（ポクロフスキー——引用者）は、わが国の学校は現状ではまだプロレタリア的、マルクスの学校でないと正しく言い切ったと私は思う。なによりも、われわれはそこに労働・ポリテフニズム学校の性格を付与できなかった。ミハイル・ニコラエヴィチが、わが国ではポリテフニズム学校への関心、その発展への関心がいくぶん低下したと言い切っているのは正しい。しかし彼は、労働ポリテフニズム学校の理念が試験に耐えられなかったのではなく、わが国がこの学校への試験に耐えられなかったのだと述べている。ポリテフニズム学校は、科学的な工業にあるいは科学的に組織された農業の拠点に依拠しなければならないのである」⁽¹⁰⁾。

中等普通教育の労働者の就学に関わっては、出席者の発言には、「第二段学校では労働者の子供の中退が多い。労働者は第二段に不満である」（ヴィヒリョーフ（シベリア））、というものや⁽¹¹⁾、ビシャーリン（レニングラード）のように、「労働者階級の中には第二段学校についてき

わめて大きな不満が見られる。大学進学にも就職にも向いていないからだ。」とするものがあった⁽¹²⁾。しかし、労働者が中等教育を求めているとする立場の発言もあった。リュビーモフ（カルーガ）は「第二段学校は不十分点がたくさんあるが、しかし労働者は逃げ出していない。その欠点を指摘しながら、改善を要求している」⁽¹³⁾と発言し、また、ペレーリ（地方名不詳）は、「われわれはプロレタリア労働者大衆にも党の幹部にも教育制度について余りに僅かしか情報を与えていない……。労働者も中学校に行きたがっているのだ……。ルイシヴェンスキー工場では、国民教育部の許可も得ずに8学年学級を3つも開設した。地区が資金を出さないのに……。」と報告した⁽¹⁴⁾。

いずれにしろ、これらは、民衆の間において、普通中等教育までふくめた学校教育要求がこの国でもある程度高まってきたことを示していた。

結局、ポリテフニズムについて、この会議は、普通教育系統の学校網全体を、「あちこちの分野で現存する可能性を考慮しつつ、段階的にポリテフニズムのシステムに移行するプランを作成するようナルコムプロスに委ねる」と決議した⁽¹⁵⁾。すなわち、第二段学校を職業学校化する方針に踏み込むことを明示することは避けて、ポリテフニズムに移行するという表現でなんとか踏み止まったのであった。

このように、1929年始めの州・地方教育部長会議は、ナルコムプロスの系統内部におけるスターリン改革の強硬な手法に従順な一群の台頭とそれによる教育の階級闘争強化路線の押しつけを明るみにするとともに、従来からの普通教育ポリテフニズム派と中等普通教育職業化派の双方の歩み寄りによって、工業化のための「学校ポリテフニズム化」路線が選択されたことを確認したのである。

他方でこの頃、教師たちの社会組織、ソ連文教労組の第7回大会（1929年3月）は、その決議において、全員就学の実現、一般学校と生産活動の結合、職業技術学校網の拡大、連邦共和国間の学校制度の一本化など、現下の課題は「文化・啓蒙過程そのものの内在論理的な発展だけから生じたのではなく、新しい再建期への移行という客観的事実によっても……提起されたのである」という定式化をもって、まさに上からの改革の課題を受け入れることを表明していた⁽¹⁶⁾。

党の階級闘争強化の路線による粛清の嵐は、ナルコムプロスにおいては、この年1929年9月、人民委員が、教育の哲学と雄弁の才をもつ文人ルナチャルスキーから、党の実務分野の出身者アンドレイ・ブーブノフへと交代するところに達した。これによりナルコムプロスは、人民委員を先頭にして、文化革命路線を積極的に実行する姿勢になる。

(2) 教育人民委員ブーブノフ下のポリテフニズム化

ブーブノフが新しい教育人民委員として施政方針を展開したのは、1929年10月末の革命12周年記念の演説においてであった。ここでブーブノフは、とりわけ、文化革命に対する態度を次のように述べた。

「われわれは文化革命を大衆の巨大な運動と理解している。なぜならば、全員就学、文盲一掃などのような大衆の文化事業は、お役所的な手法や官庁機関によっては解決することができないからである。これらの解決は、この事業への広範なプロレタリア世論を参加させる方法に掛かっている。(中略)われわれはまた、わが国における文化建設が〈平和的な〉文化主義の形によっては展開され得ないし、展開されていないことに留意しなければならない。そこは階級闘

争の舞台であり、われわれはここで階級敵に対して系統的な攻勢をかけなければならない」⁽¹⁷⁾。

これはたしかに前任者とはまるで異なる、新しい時代の政治スタイルを象徴するものであった。

1930年4月の末、延び延びにされてきた教育問題第2回党協議会が開催された。これを仕切ったのはブーブノフであった。彼は、もはや支持を失ったルナチャルスキー時代の1929年春の「会議要旨」ではなくて、この年の4月始めにナルコムプロス参与会とコムソモール中央委員会、教員組合中央委によって承認された、「第二段学校に関する」決議⁽¹⁸⁾を提示した。

中等段階の再編問題について配布された「会議要旨」では次のように言う：

「現段階の中心課題——市街地においても農村においても全員・義務・七年制教育を実施する——の解決に引き続いて、十二年制の普通教育・ポリテフニズム学校を持つことを可能にする、この問題の党綱領の全面実現へ移行する展望が開かれつつある〔以上の部分は合同「決定」5節2項〕。しかし、まだ現在、われわれは、国民教育分野における共産党綱領の全面実現までの経路を講じなければならない。この経路は、一つは、職業教育の中等段階（FZU学校、テフニクム、職業訓練校）の展開とポリテフニズム化を通じるもの、二つには、七年制学校を基礎にした労働者学部（FZU）の制度の発展を通じるもの、である」⁽¹⁹⁾。

会議によって採択されたこの文書は、各学校の多種類化・職業学校化を次のように構想していた。すなわち、第一段学校（小学校）だけは共通の一般教育を教えるために残され、もとの第二段学校は消滅する、というものである。1931/32学年度までに労働者の全子弟はFZS（工場付属七年制学校）に就学するはずであり、また、過渡的状况を考慮して、期間を短縮された型のFZSとShKM（農民青年学校）および夜間制と通信制のFZSとShKMが予定され、さらに職業訓練校（profshkola）が追加された。これを言い換えれば、その第二段学校の前期課程の部分は、工場がある地域では工場付属七年制学校に、農村部では集団農場青年学校に、また市街地の七年制学校の一部は新しい制度として、公共事業七年制学校（ShKS: shkola kommunal'noi semiletki）として再編されて、職業訓練を提供することになっていた⁽²⁰⁾。第二段の後期課程部分は、すぐに再編されて、各経済部門の管轄下のテフニクムになることになっていた⁽²¹⁾。

この改革文書は、「中等・普通ポリテフニズム学校の諸タイプ（ShKM, FZS, 七年制学校, 九年制学校, 多様な職業傾斜をもつ第二段後期課程, FZU）が現在相互に孤立した状態に」置かれていと指摘し、「単一・ポリテフニズム学校」の創造を焦眉の課題とうたうものの⁽²²⁾、実際には、統一労働学校の理念を放棄しようとするものであった。

4ヵ月後、党中央委員会とロシア共和国人民委員会議は、決議を承認した。この改正の法制上の決定——「労働学校第二段の再編について」（8月10日付、ロシア共和国人民委員会議決定）は、「経済と社会・文化建設の全分野の中級資格の専門家養成の改善のため」、上級学年（第8, 9, 10学年）の40%以上を1930/31学年度始めより関係官庁に移管するとともにテフニクムに再編成する、とうたった⁽²³⁾。

この4月党会議で、ブーブノフ報告はポリテフニズムについて次のように自分の理解を述べた。

「われわれは今、われわれの建設活動が、わが国のコトバ主義で丸暗記中心の学校を正真正銘のポリテフニズムの学校に転換するための強力な基礎を都市でも農村でも作り出す、これができる状況を得ている。われわれの足下にあるものをポリテフニズムの発展のために利用できないなければならない。」

「わが国には大きな論争があった。論争は……第二段後期部分を〈テフニクムの型の学校〉に再編する必要があるという考え方に関わって行われた。」「われわれはなぜこの考え方を選んだのか？ もっともうまく行きそうだからわれわれはこの考え方を選んだのである。それが第二段後期もテフニクムも同時にやっつける (bit') からである。それは、第二段後期を暗記主義で言葉中心の学校としてやっつけ、だがテフニクムも、暗記主義のクニージュニク〔現実を知らない本の虫——引用者〕がまだ残っているが同時に狭い手職主義もかかえている学校としてやっつけるのである。ここに狙いがある。」⁽²⁴⁾。

ところで、この会議に出席したウクライナの教育人民委員、スクリープニクはその報告の中で、「形式でなく、本質によるポリテフニズムを」と訴えて、かつてレーニンが「われわれは貧しい（3度も言った）だから全員が指物師や旋盤工になる必要がある」と言ったことを引き合いにして、「職業的ポリテフニズム」への移行を提案した⁽²⁵⁾。

党会議の討論の中では、ガーステフ方式がウクライナでは盛んに用いられているのを打破したいというコムソモール活動家の発言があった。「われわれはガーステフ主義がまだ根強いことを忘れてはいけない。スクリープニクその他の同志にお伝えするが、ハリコフ・トラクター大学はそっくり、ガーステフの方法で労働力を訓練している。〈ドン・ウーゴリ (石炭)〉は、ガーステフ・システムで労働力を訓練することで一般契約を締結した。建設産業は全体が、その労働力人材をガーステフの方式で養成している。スターリングラード・ストロイ、トラクタ・ストロイ、クズバス、マグニトゴールスクその他だ。この危険性を党の会議が見逃してはいけない」⁽²⁶⁾。

クループスカヤも会議に出席しており、発言した。彼女は、農業の集団化が進められていることを念頭に置いて、ポリテフニズムは農業にも関わることを、機械に関する知識を取り込む必要があることに触れた。また、ナルコムプロスの社会教育総管理局が5月15日にポリテフニズム大会を予定していること、第二段学校とテフニクムに対しては、現在どこも提供していない中位の熟練労働力を輩出できるポリテフニズム的な施設にしたいと表明した。また、この再編方針文書において失業者や最下層の労働者を訓練する職業訓練校を党会議が制度として認めていることに鑑み、当面の必要からだとして承知した。しかし、ガーステフ方式の批判に関わり、それは生産過程のどこに位置するかを自覚し、改善に参加する意識と規律を無視することと指摘しつつ、これらの職業訓練校も同様に無視しやすいと注意するのを忘れなかった。また、スクリープニクの「職業的ポリテフニズム」提起に関わっては、彼女は「マルクス主義的な鍛錬」というテーゼを対置して、先の29年2月の『途上』誌論文でも述べた観点から、社会主義を志向しつつ近代的な技術・労働訓練を確実に実施するという両面を保持する必要を訴えた。結びで彼女は「私は、この党会議の後、ポリテフニズムの問題に取り組む大がかりな活動が必要だと考える。」と述べた⁽²⁷⁾。

この発言は、ポリテフニズムをアカデミックな学習への攻撃に用いるプープノフのポリテフニズム路線に対する抵抗の意思表示でもあり、また、ポリテフニズムの教育内容と方法、組織的な条件などがまだ整っていないことの誠実な告白でもあった。

この年、6-7月にかけて開かれた第16回党大会で、教育人民委員プープノフが発言している。彼は、ポリテフニズムに関わって、「われわれはポリテフニズム学校を達成しなければならない。われわれは学校が生産のほうに顔を向けることを必要としている。学校は本の虫でなく、社会

主義労働の人間を送り出さねばならない。」「中等学校を正真正銘のポリテフニズム学校に転換することが必要である。なぜといってわれわれの前にあるのは、上級と中級のカテゴリの専門家養成という大きな課題だけでない。われわれの前には熟練労働力の育成という巨大な課題もあるのだ。したがってわれわれにはファブザヴッチ〔工場付設学校〕が必要であり、プロフコムツェントル〔職場委員会中央〕が必要なのだ……」とうったえた⁽²⁸⁾。

ポリテフニズムが、コムニスト一般に分かりやすくアピールするためとはいえ、文教行政の最高責任者によってこのようにごく簡明なスローガンでしかも学校の独自性を無視する形で表現されるものに還元されつつあった。これはまた、シュリギーンらの単純化されたスローガンが跋扈する時代の機運とも見合ったものであった。

(3) 全ロシア・ポリテフニズム教育大会（1930年8月）と理解の相違の凍結

教育人民委員部は、ポリテフニズムに向けて世論を動員するため、全ロシア・ポリテフニズム教育大会を招集した（モスクワで8月10-16日開催）。決議権を持つ代議員は679名であり、その内訳では一般労働組合からの者が117名、企業体経営者が77名ほど含まれた⁽²⁹⁾。

大会はまず党中央委員会から、宣伝扇動部長アレクサンドル・ステーツキーによる祝辞を受けた。彼は教育政策における党の観点を実務的に表明した。彼は、「この文化建設の建て直しと加速の事業においては、全員義務教育がもっとも重要な環である。わが党中央委がこの問題に関して採択した諸決定は（中略）文化建設の事業における決定的な一歩である。まさに今われわれは文化において文明化された諸国民に追いつく運動のスタート地点に立っている」と言っており、義務教育制の実施の優先性と世界政治におけるロシアにとっての意味を指摘し、次いで、大きな工業中心地においては義務教育として導入すると決定された七年制学校について、「これはその他すべての専門的な学校のためのポリテフニズム的な基礎」であるとする公式見解を述べた。

中等段階の性格に関しては、その上級課程をすべて専門の学校、テクニクムに転換するという先日の党決定をもって「長年の論争はすべて今やもう終わった」と言いきる。

最後にポリテフニズムについて、「わが国の学校はどうあるべきかという問題については、ポリテフニズムがあるということに尽きるが、今までまだ一致した意見がないと私は言わねばならない。古い学校、『コトバ主義』の学校をうち切らなければならないという点では皆がおおむね一致しているようだ。」⁽³⁰⁾と語り、プーブノフと同じ理解の内容と水準にあることを示した。

ここに表明されている、七年制教育部分をポリテフニズムに基づいたものにするとうたう点が、クループスカヤらが歩み寄った線なのであった。

①クループスカヤの報告：「国民経済の改造とポリテフニズム教育」

大会の開会の辞の中でクループスカヤは、始めに、理論と実践の試みの経過を振り返りつつ、今まで、ネップの時期つまり経済再建期にはポリテフニズムの基盤条件が弱くて、工場付属七年学校と農村青年学校の2タイプでポリテフニズムの理念が基礎に敷かれ、授業と生産を結びつける試みがあつたに過ぎず、「全体としては、第一段学校も第二段学校もポリテフニズム学校ではなかった」と結論した。彼女は次いで第16回党大会（1930年6月）が「進行中の経済建設の社会主義的な本質を明らかにし」として、この時点の政治状況評価を党中央に一致させた⁽³¹⁾。彼女は、「ポリテフニズム学校の理念を宣伝するだけの時代は、すでに過去となった。現

在は、わが国の一般の学校を実際に（中略）ポリテフニズム学校に変える時期である」。これは実生活と生産活動が「有無を言わせぬ形で要求しているのである」として、直面している社会変化は学校ポリテフニズム化を要求し、かつ可能としている、と結んだ⁽³²⁾。

大会の本報告においてはクループスカヤは、多岐にわたって事例を引いて語ったが、それは例えば、「われわれが国民経済において我々の直面する課題は資本主義国に追い付き追い越すことであるという時、これは単に扇動のスローガンではない。これは、資本主義国には見られない組織された自覚の大衆という新しい巨大な力がわれわれのもとで、ソビエトの国という条件のもとで作られているという、深い自覚なのである。そして、こうした力が今度は、このスローガン『追い付き追い越せ』をごくりアルなスローガンに変えるのである。これは扇動の問題でなく、われわれが目撃している事実の確認である」と言うごとく、生じつつある大衆の組織性と自覚をことのほか強調するものであった⁽³³⁾。

彼女はまた、当時、技術が新しい労働分野に及んでいる、種々の生産を分断している壁をこわしつつある、生産過程の電化、化学化、機械化はすべての生産を結合する共通のものを創り出している、と新しい側面を指摘し、青少年のポリテフニズム的な訓練は、工業と農業の技術的再編にともなう諸困難を克服するのを保障すると強調した。

しかし、彼女は、「われわれは過信してはいけない」とも言い、学校建築の貧弱さを示す例や、近くにある七年制学校の教育に興味を持たない工場の例を挙げ、さらに、今日建設しては明日に破壊するといった無計画性や、トラクターなど貴重な機械も保管する意識を持たない農民などの例を挙げて、古くからの習慣の残り滓を批判した。それとともに彼女はいつものように、手職訓練中心のガーステフ主義を批判した⁽³⁴⁾。

報告は、ポリテフニズム化の実践提案はショーヒン報告で出されることになっていると述べたうえ、その実現にはエンジニア・知識人や、労働組合、経営者側の学校協力が不可欠だと注意を喚起して終わる⁽³⁵⁾。

②ショーヒン報告：一般学校の企業貼り付けによる生徒実習

クループスカヤの基本報告とセットにされた実践提案部分を「学校のポリテフニズム化の方法と形態」と題して担当したのはアンドレイ・ショーヒン（1901-1938）であった。彼は、コムソモール活動家として職業教育施設づくりに携わった経験の持ち主で、党機関紙「プラウダ」の学校・文化部主筆の時代に1929年、教育人民委員ブーブノフの推挙によって、粛清後のナルコムプロス参与会メンバーに入った一人であった⁽³⁶⁾。ナルコムプロスの学校局長としてブーブノフらと共に後期中等部分の全面的職業化を主張してきた、新しい世代のショーヒンがこの大会で重要な役割を演じるに至った。

ショーヒンは、「わが国における主要な危険は、コトバ主義ポリテフニズムとか一種の百科事典的態度といった、ポリテフニズムの右翼日和見主義的な解釈にある。この『ポリテフニズム』にあっては一切が生産についてのおしゃべりで『満たされ』、その要綱も生産について語るが、実際にはそこで生産について知ることはまったくできない」と断定調で総括を行った上で、次のように提案する。

「教育制度全体のポリテフニズムへの途は、学校と陶冶を具体的な生産と結びつけることを通じて、生産一般ではなく具体的な生産へ、当該の生産環境へのポリテフニズム的な接近を通じて行う」。第2の途は、「子供の生産労働を通じる」もの。第3は、「事業所の生産・経営計画に

教育機関を参加させることを通じる」もの。第4に、われわれの条件におけるポリテフニズム教育は共産主義教育の全体系の一部であるから、「社会活動に、階級闘争に、社会主義建設すべてへの参加に、あらゆる手だてを同時に取る必要がある」と⁽³⁷⁾。

大会はショーヒン報告に関して独自の決議を採択したが、この決議は、ポリテフニズム化の実践的対応として、一般学校の企業貼り付けによる生徒実習を決定した。

大会決議はこうして第6項「学校の実践的なポリテフニズム化」の手だてにおいて、次のことを提起した。

- イ)「学校の企業、ソフホーズ、コルホーズへの帰属。市街地では1930年9月15日までに、農村部では10月1日までに、生産事業所に帰属しない学校が一つもないようにする。」
- ロ)「当該の生産の教授学習と生産労働への子供の応分の参加が、学校で作成される要綱全体の中軸となる。」
- ハ)「生産へ導入する指導課程を学校ごとで設定すること。これはもちろん、あらゆる学科と〈科目〉を生産と具体的に連携させることを義務づける」ものである。
- ニ)「第一段学校には、子供たちを生産技術(木、金属、彫塑材等のごく簡単な加工)になじませ、子供の高い能力を……発明活動へと向けさせる作業室および作業小屋を設置」。
- ホ)「五・七学年のために、生産環境との関連で選択される……工作・実験室を設置」。
- ヘ)「上級学年生徒のために、FZU作業室、市街地では企業の職場、農村ではソフホーズとコルホーズで、生産実習を実施」。
- ト)「工場、ソフホーズ、コルホーズで公共活動を実施、ならびに企業・ソフホーズ・コルホーズの生産計画の遂行を支援するために学校そのものを動員」⁽³⁸⁾。

このショーヒン報告決議にいう、学校への作業室・作業小屋・実験室の設置(ニ、ホの項)、生産学習と生徒の生産労働参加を学校カリキュラムの中軸とする(イの項)、企業の生産計画の遂行に学校を動員する(トの項)という措置は、この期に実行されることになった。これらが後にも残り、学校のソビエト的な特徴となる。この点はさておき、上のような一般学習軽視、生産傾斜がブーブノフやショーヒンのポリテフニズム概念の具体化なのであった。

③前ナルコムプロスのポリテフニズム理解に対する非難

大会のグループスカヤとショーヒン両報告に関わる討論セッションにおいては、ポリテフニズム理解の相違が現れた。

教育人民委員代理のエプシテーインは従来からの一般教育要素を保持するポリテフニズム理解を崩すことなく、「もしわれわれがわが国の大衆的な学校に、第一段学校やFZS(工場付属七年制学校)、FZU(工場付属徒弟学校)だが、ここにポリテフニズムの要素を定着させるのに成功し、われわれが生産部門に質の高い労働力を、技術の点から、社会主義的な労働組織の点からみて訓練された労働力を提供できるなら、また、ポリテフニズムを保障することによってわが国の工業や農業に必要な上級と中級の専門家や労働力の養成機関を短縮するのに成功するなら、それによってわれわれはポリテフニズムの問題を最も重要な政治的・経済的な問題の高さに引き上げることになろう。」と発言した⁽³⁹⁾。

ヴォルガ下流地方の代議員は、ルナチャルスキー時代の教育人民委員部の政策について、現人民委員代理のエプシテーインに対して、「この大会では、古い学校の支持者たちに対しては、彼らがポリテフニズム学校の発展をじゃましてきたことは間違いだったと率直に認めることを

要求する必要がある。エプシテーイン同志は数年前ポリテフニズム学校を否定していた。」と言って自己批判を要求した⁽⁴⁰⁾。また、教員組合中央委の代表は、ナルコムプロスの前指導部に対する非難を続け、また、今大会においてエプシテーインが現路線に全面的な賛成の発言を行わないことに対して、「ここ、ポリテフニズムを目指す闘いの前衛であるこの大会で、彼はくもしわれわれが成功するなら」と宣言するのだ?! 要するにエプシテーイン同志はわれわれが学校のポリテフニズム化に到達できるかどうかを疑っているのだ。つまり、エプシテーイン同志は今日においても、ポリテフニズム大会という形を取った運動を見て居らず、ポリテフニズム学校を目指す大衆の運動を見ていないのである」と言いがかりを付けるような態度に出たのであった⁽⁴¹⁾。

これらに対して議長は、後で組合には独自の報告の時間があるからと取りなして切り抜けたのだった。いずれにしろ、ポリテフニズム理解における本質的な相違は持ち越された。また、大会における討論の在り方には、時の中央派に対して正面から賛辞を言わねばならないような形式主義・儀礼主義が強まったのであった。

④クループスカヤの「結語」

大会では、慣習のような議事構成にしたがい、クループスカヤは報告に関わる討論のあと、時間において「結語」を報告した。

彼女の「結語」のかなりの部分は、ポリテフニズムの実現につらなる取組に参加を期待されながら非協力的あるいは不十分な対応に終わっている諸団体・機関への批判にあてられた。彼女は、「ラヂオの友」など様々な任意団体もポリテフニズムの支援に取り組んでいるが、その中で「テフマス」（技術を大衆に、の意——引用者）は大学進学準備講習をやっており、技術普及は二の次にする現状であることを批判した⁽⁴²⁾。さらに彼女は、レニングラードの模範学校および学校方法研究所は何度も開催してきた代表教員会議も実践経験を普及させてこなかったため、試みは孤立した実験、経験にとどまり、ポリテフニズムのために力にならなかったと批判した。また、彼女は、工場徒弟学校が例えばその上部の繊維系などの単科大学と連携がない状況を批判した⁽⁴³⁾。

彼女はこの間実施されてきた企業経営者の学校支援契約に対する姿勢について、報告に続いてこの「結語」で再び触れて、「まるで、現在は、経営者たちは契約まで進む用意があるみたいであり、労働組合も同様であるが、契約にも様々なものがある。しかし、シベリヤで結ばれた契約の話聞いたとき、私は、これには懐疑的な気分になった」と打ち明け、支援契約の遂行率の低いこと、コルホーズ中央機関、建設労組中央委との契約経験のかんばしくない例を挙げた。「このすべてが示すのは、契約書を交わした場合でも、村まで知らされないなら、地方組織まで知らされないなら、広く世論で議論に付されないなら、契約遂行に対する特定人物の責任を定めないなら、それはしばしば体裁だけに終わり、実際は何ら真剣でないものだ、ということである。」と結んだ⁽⁴⁴⁾。

このようにクループスカヤは教育に対する社会団体、特に経済界のポリテフニズム支援に対する非協力的な対応に率直な批判を述べたのであった。

結語の最後を彼女は、「子供の力を知らなくてはならない。われわれはしばしばポリテフニズム学校を作るのに熱中して、まったく子供の力を考慮しない……。もしわれわれが子供をごく小さい時からつらい仕事に結びつけ、無条件に競争に参加させる等のことをすれば、われわれ

はプラスでなく、マイナスを得ることであろう。」と警告で締めくくった⁽⁴⁵⁾。

これは、ショーヒンらの提案に関わって、さらに起こりそうな、子供の取り込みの行き過ぎによる労働嫌い、工場嫌悪などに対する懸念から出たものであった。

⑤クループスカヤ報告に基づく大会決議：その原論志向

全ロシア・ポリテフニズム教育大会は、クループスカヤが行った基調報告に基づき決議を挙げた。それはもちろん以後の取組の方向性を与えるための文書であったが、その構成と内容は、以下に抜粋するところからも明らかなように、きわめて原理論的で夢想的な性格さえ帯びたものであった。

「1. わが国で現在取り組まれている経済の再建はあぎやかに社会主義的な性格を帯びつつある。それは、国全体のために、広範な勤労者大衆のために、彼ら自身の手で行われつつある。ソビエト権力の構造そのもの、その性格が、これらの問題の回りに彼らを組織させている。経営の問題は中央執行委員会から村や市のソビエトに至るソビエトで議論される。同じく問題は労組の組織でも議論される。」「このようなことは資本主義国では決して存在しない。」

「2. 単一の経済計画は国の経済全体の合理化の見通しを与えている。」「一つ一つのコルホーズ、工場が社会主義の経済機構のネジと歯車に転化して行く。ポリテフニズム教育は、若い世代に社会主義経済建設のロマンを与え、偉大な社会主義体制に力と能力に応じて参加し、様々な経済分野を実際に学習する機会を与えなければならない。」

「3. わが国の経済の再建は都市と農村の生産全体の工業化の路線を進んでいる。」

「4. 農業の分野で成し遂げられつつある再建は、大地での労働と企業での労働を接近させつつあり、労働者と農民の労働を接近させつつあり、このことによって都市と農村の労働の社会的分割の経済的基礎を廃止しつつある。」

「5. 現在の技術は、労働をたやすくしつつある。肉体的に強い労働力だけが遂行できたような種類の労働——鍛冶労働、荷役労働、等——は、今では機械によって行われており、このことが女子労働の広範な使用を可能にしつつある。」「全般的なポリテフニズム教育は生産における女子の比重を高めることであろう。」

「6. 現代の技術はソビエトの条件において、熟練労働と非熟練労働の境界線を廃止しつつある。根底においては熟練労働の性質が変化しつつある：熟練労働者に対して訓練ははるかにわずかしき要求されず、純粹の手の技能は少ししか要求されないが、その代わり生産過程の本質のより深い理解が要求される。」

「7. 現代の技術は、ますます新しい労働分野に広がっていくとともに、様々な生産の間の障壁を破壊しつつある。」

「8. 熟練労働者と非熟練労働者の間の溝をうち破るなら、肉体労働と頭脳労働の接近という現代技術の傾向は他方のソビエトの条件下できわめて有利な土壌を得られるであろう。」

「9. 現場会議、各種生産委員会、工場委員会、社会主義競争などへの労働者の参加は、労働者大衆の実務技能を高め、強力な組織者の創出を促すであろう。」⁽⁴⁶⁾

決議は以上のように、『資本論』に基づく理論仮説を借りながら、大工業化と社会主義化がロシアにおいて端緒を示していると評価するとともに、「若い世代の教育をポリテフニズム化する

必要は、まさにそこから全面的に生じるのであり、われわれはこの世代を工業生産一般の科学的な基礎の理解で武装させなければならないし、現代的な労働文化を教えてやり、様々な生産分野、様々な技術過程の間の連関を理解させなければならないのである。われわれはすべての子供、すべての少年、すべての青年をわがソビエト・ポリテフニズム学校を通過させなければならない。」⁽⁴⁷⁾と結論した。

そして、当面の組織的な基本課題を次のようにまとめる。

「10. ポリテフニズム教育はナルコムプロス関係機構の事業であるだけでなく、ヴェセンハ、農地人民委員部、労組、若い世代自身を始めとする国全体が切実に関わる事業でもある。」

「11. 国全体が技師、農業技師、研究者を急いで養成する必要を切実に感じている。」

「12. この事業全体を巨大な規模にしなければならない。経済、労組、コルホーズ、文教の各組織の間で包括協定を結ばなければならない」⁽⁴⁸⁾。

この決議は社会変化の現実と可能性を反映したというより、きわめて原論的、展望的なものであったがなぜであろう。これは、プープノフ、ショーヒンら狭い職業教育派のポリテフニズムに対するクループスカヤの対抗の意思が込められたためと見るべきではないだろうか。大会決議は、彼女に対する敬意も働いたのであろう、報告と結語で学校への非協力的な対応を批判された経済分野の参加者も、農業関係のそれも賛成するところとなり、満場一致で採択された。

このようなわけで、1930年8月のこの大会の後ロシアの諸学校がポリテフニズムの具体化に進むことはまだ不可能であった。大会参加者の印象をまとめた、直後の、ある「彙報」は次のように書いた。

「〈ポリテフニズムを生活の中に持ち込むこと〉——これが第1回ポリテフニズム大会メンバーの気分と願望をはっきり表す言葉である。ことの新鮮さの故、大会はポリテフニズムの現実の実施方法について十分深い検討を行うことはできなかった。現在そのためには経験と観察があまりに少ないのだ。大会はまた、この分野の学校と社会団体の活動の明瞭な実務的プログラムも打ち出すことができなかった。なぜならこの方途の手探りしかやられていないのだから。」⁽⁴⁹⁾

ポリテフニズム理解の相違をいわば凍結させたままに大会は終わった。ポリテフニズムを広い世論に持ち込んだことで成果だったと雑誌は書いた。その実現方法はおろか、そもそもロシアの一般学校は「新しい」カリキュラムと教授法の面で準備できていないのであった。この点から、及び学校・事業所の困難な協力関係を巡って、この秋以降、ポリテフニズム実践史にはさらに混迷の局面が予想された。

結びに代えて

紙数と時間が尽きたため筆者のソヴィエト・ポリテフニズム史の第1論文は、ここまでとさせていただきます。1930年秋から1931年8月に至る展開は続く第2論文においてえがかれる。

なお、本論文で使用した資料のうち「Бюлетень Наркомпроса」誌；「ЗКП」紙；ポリテフニズム大会資料を入手するに際しては福岡教育大学の山口喬氏にご協力を得た。ここに記して謝意を表したい。

第2章——注

- (1) А. В. Луначарский, Из речи на VIII Всесоюзном съезде ВЛКСМ. <А. В. Луначарский о народном образовании>, М., 1958, стр. 434, 435-436. (著作「コムソモール第8回大会演説(08. V. 1928)から」)。
- (2) Н. К. Крупская, О политехническом образовании, “На путях к новой школе,” 1929, № 2, стр. 7, 8; Н. К. Крупская, Педагогические сочинения, т. 4, 1959, с. 189, 190; 邦訳, 勝田訳『国民教育論』175頁; 『ポリテフニズムと教育』市来・関・福田訳, 68, 70, 71頁。
- (3) Крупская, Педагогические сочинения, т. 4, с. 193; 邦訳, 『国民教育論』180頁; 『ポリテフニズムと教育』75頁。
- (4) “Народное просвещение”, 1929, №3/4, стр. 39, 40.
- (5) Там же, 1929, №3/4, стр. 37-38.
- (6) Бюллетень Наркомпроса РСФСР, 1929, №14 (1 апр.), стр. 8; 参照, L. Holmes, The Kremlin and the Schoolhouse: Reforming Education in Soviet Russia, p.120.
- (7) “Народное просвещение”, 1929, №3/4, стр. 42.
- (8) Там же, 1929, №3/4, стр. 42.
- (9) Там же, 1929, №3/4, стр. 47, 48.
- (10) Там же, 1929, №3/4, стр. 51-52.
- (11) Там же, 1929, №3/4, стр. 56.
- (12) Там же, 1929, №3/4, стр. 57.
- (13) Там же, 1929, №3/4, стр. 54.
- (14) Там же, 1929, №3/4, стр. 55.
- (15) Бюллетень Наркомпроса РСФСР, 1929, №14 (1 апр.), ст. 284: стр. 7. 参照 Ф. Ф. Королев, Т. Д. Корнейчик, З. И. Равкин, Очерки по истории советской школы и педагогики, 1921-1931. М., 1961, стр. 203.
- (16) Э. Д. Днепров, Комментарии, стр. 542. В кн.: <А. В. Луначарский о воспитании и образовании>, М., 1976.
- (17) А. Бубнов, Организационные задачи культурной революции, “Народное просвещение”, 1929, №11, стр. 7; А. Бубнов, <Статьи и речи о народном образовании>, М., 1959, стр. 37, 38. 「文化革命の組織上の課題」
- (18) 1930年4月10日付け「第二段学校に関するロシア・ナルコムプロス(教育人民委員部) 参与会・コムソール中央委・ツェクプロス(教育労組中央委) 合同決定」。Бюллетень НКП, 1930, №14 (10 мая), стр. 2-5: ст. 404; Школа II ступени реорганизуется, Комсомольская правда, от 20 апреля 1930, стр. 4; “Народное просвещение”, 1930, №5, стр. 6-10.
- (19) А. Бубнов, О системе народного образования, <Статьи и речи о народном образовании>, стр. 55.
- (20) 「第二段学校に関する」合同決定第3章。“Народное просвещение”, 1930, №5, стр. 7-8. ここで新たに学校体系の一環として付け加えられた公共事業七年制学校とは, 決定によれば, 「水道, 発電所, 工場付属厨房, 自動車修理工場, 市街鉄道修理工場, 近郊菜園のような自治体施設の生産部門を教材として利用する学校」である。
- (21) 「決定」第4章。“Народное просвещение”, 1930, №5, стр. 8.
- (22) “Народное просвещение”, 1930, №5, стр. 6-7.
- (23) “Собрание Узаконений РСФСР”, 1930, №36, ст. 464.
- (24) А. Бубнов, О системе народного образования, <Статьи и речи о народном образовании>, стр. 56, 58, 59.
- (25) Н. Скрыпник, Основные принципы единой системы народного образования в СССР. Газета “За Коммунистическое Просвещение” от 1 мая 1930, стр. 3-4. (以後“ЗКП”とする)
- (26) “ЗКП” от 29 апреля 1930, стр. 2.
- (27) Н. К. Крупская, Политехнизм при теперешнем состоянии техники, Педагогические сочинения, т. 4, стр. 232-3, 234, 235, 236. (「現状の技術の下でのポリテフニズム」)
- (28) “ЗКП” от 7 июля 1930, стр. 3.
- (29) «Первый Всероссийский съезд по политехническому образованию. Доклады, прения, резолюции и др. материалы». М.- Лг., 1931, стр. 477.
- (30) Там же, стр. 15-16.

- (31) Там же, стр. 12; Н. К. Крупская, Педагогические сочинения, т. 4, стр. 270, 271; 邦訳, 前掲『国民教育論』所収 pp.186-7, 187.
- (32) «Первый Всероссийский съезд по политехническому образованию», стр. 13; Крупская, Педагогические сочинения, т. 4, стр. 271; 邦訳, 同上 p.188.
- (33) «Первый Всероссийский съезд по политехническому образованию», стр. 20; Крупская, Педагогические сочинения, т. 4, стр. 272-3; 邦訳, 同上 p.189.
- (34) «Первый Всероссийский съезд по политехническому образованию», стр. 27, 31; Крупская, Педагогические сочинения, т. 4, стр. 277, 286; 邦訳, 同上 pp.194, 202-3.
- (35) «Первый Всероссийский съезд по политехническому образованию», стр. 33-4; Крупская, Педагогические сочинения, т. 4, стр. 288; 邦訳, 同上 pp.204-5.
- (36) Виноградов А., Руднев П., Андрей Шохин, “Народное образование”, 1966, №12, стр. 87-8.
- (37) «Первый Всероссийский съезд по политехническому образованию», стр. 41-2.
- (38) Там же, стр. 491-2.
- (39) Там же, стр. 97-8.
- (40) Там же, стр. 103.
- (41) Там же, стр. 112-3.
- (42) Крупская, Педагогические сочинения, т. 4, стр. 289. なお, 勝田訳『国民教育論』の大会報告訳は, 「結語」における社会团体・経済団体批判の部分が無断で省く「偏向」をおかしていた。
- (43) Там же, стр. 291, 293.
- (44) Там же, стр. 293-4.
- (45) Крупская, Педагогические сочинения, т. 4, стр. 301; 邦訳『国民教育論』所収, pp.208-9; 園部四郎編訳『幼児教育について』新読書社, 1973年, 所収, p.193.
- (46) «Первый Всероссийский съезд по политехническому образованию», стр. 484-487.
- (47) Там же, стр. 484.
- (48) Там же, стр. 488.
- (49) А. Зеленко, Первый всероссийский политехнический съезд и впечатления его участников, “На путях к новой школе,” 1930, №10, стр. 44. Зелеэнко (教員研修所員)「第1回全ロシア・ポリテフニズム大会と大会参加者の印象」。